

Parody としての James Joyce の “Ulysses”

永 松 定

昭和4年頃、東京大学を出て間もないころであったが、わたくしたちは伊藤整、辻野久憲の三人で、James Joyce の “Ulysses” を日本語に翻訳するという困難で且つ多分の忍耐を要する仕事に従事していた。そのやり方は、三人が夫々分担をきめて、各々自分の訳した原稿を、週に一回程度、三人の家に順繰りに持ち寄り、一人が自分の原稿を読むのを、他の二人は原書を睨みながら、その訳文が忠実に、うまく訳されているかどうかを検討するという方法であった。このうち辻野だけは、著者のジョイス自身も立ち合ったということで、ヴァレリイ・ラルボー (Varery Larbou) と著者自身の厳密な鑑条を経た当時名訳という定評の世界唯一の訳書であったフランス語訳を睨んでいたわけであった。というのは、現在ではドイツ語訳初め世界の殆んどあらゆる文明語に訳されていて、日本語訳さえも、吾々の新潮社から戦後出たこの訳と、主として森田草平が事に当った岩波版のそれと、戦後丸尾方一らがことに当った河出版と三種類現存するぐらいであるからである。

伊藤整については、後年チャタレー(Chatterley)裁判事件以来高名の作家となったので、別に説明の必要もないだろうが、辻野久憲は二、三冊の翻訳書を出版しただけで、戦時中に、まだ若くして夭逝したので、少し説明しておくが、当時はまだ東大フランス文科在学中の二十二、三歳の学生で、岸田国土の「にんじん」などの岸田さんの翻訳の下訳をしていたぐらいで、フランス語は素晴らしく出来るということであった。

当時はわずかに Herbert Gorman というアメリカ人の “James Joyce; His First Forty Years” という、Joyce が四十歳になるまでの伝記的事実を殆

ど忠実に記録したままの初歩的紹介の伝記のあるだけであった。もっとも、Gorman のこの本は Joyce が（生きているうちに伝記を書くことを評した唯一の本であって、——御承知のように、伝記や全集は著者が死んでから出すのが欧米では原則であって、生きているうちから何回も全集や伝記が出るということは殆どないのであるが。）

Gorman のこの本は、Joyce が死んでから、“James Joyce; Definite Edition” となって完成され、Joyce の伝記としては、唯一の権威あるものとなっているが、この前者の本が吾々が Joyce の “Ulysses” という難物に取り組んでいたとき、日本に輸入された唯一の参考書であった。だから原文が分からないところは、フランス語訳を見れば少しは解明するかもしれないという期待で、フランス語が素晴らしく出来るという噂の大学生辻野久憲を誘い込んだわけであった。尤も、それぞれ所属の同人雑誌などで、Joyce の “Dubliners” からの短編を翻訳したり、そのころは日本に余りよく知られていなかった、全くの新しい作家としての Joyce のことを各々独立して、（相手をお互いに知らずに）紹介したりしていた伊藤整と永松定に、ひとつ “Ulysses” を翻訳してみないか、そうしたら原稿用紙二百枚ぐらいを、淀野隆三、北川冬彦編集のクォーターリー誌「詩・現実」に載せようではないかという、淀野隆三からの耳よりの話を小生ら兩人にもたらしたのは、辻野久憲自身であった。辻野は、三高、東大仏文と淀野の後輩だったからである。

さて英語の原本で、訳のわからぬところを、辻野がフランス語訳で引き合わせてみても、原文に当るフランス語をただ並べてあるだけで、意味不明ということでは、英語もフランス語も全く同じというケースにぶつかることが屢々で、そのようなときは、三人とも全くお手上げの形で、溜め息をつく以外になすべがないという状態で、一体なんでこんな難しいことを引きうけたのだらうと、体の弱い辻野あたりが真っ先きに弱音を吐くと、伊藤は毅然として「君ら二人が止めたら、オレ一人でもやるぞ」とおどかしたものである。

参考書がなくて困ったことのひとつは、アイルランドの政治情勢につい

ての文献が、イギリスには当時殆んど見当らなかつたことであつた。アイルランドというところは政治問題のやかましいところで、(それも、どうかしてイギリスの支配から独立したいという、独立と自由のための闘争が主であつたが) 独立運動の志士のことにして、Parnell など余りに有名なひとはイギリスの普通の人名辞典にも載っているが、自由独立の闘士にしてからが、いわゆる小物に至つてはイギリスの出版物のどこを探しても調べようがなかつた。そしてアメリカはこの点イギリスを単に踏襲してに過ぎなかつた。むしろそういう、イギリスにとって都合のよくないことは、隠して現わさないというような傾向さえ見られたが、これは戦前の日本が朝鮮の独立自由の志士にとつた態度とよく似ていた。例えば“Ulysses”の副主人公とも言える(主人公は普通 Leopold Bloom というユダヤ人の平凡な広告取りとなつているので) 大学生 Stephen Dedalus がパリ留学に際して、社交界婦人から紹介された、旧独立党闘士で、パリに逃亡、隠棲して女房とともにささやかな印刷業(広告用チラシ等を刷る程度の) Kevin Eagan というのがあつたが、これが実在の人物か、小説の中だけの架空の人物か、一切解明の手掛りがないのであつた。ところが、辻野がフランスの Larousse の絵入り大百科辞典を、ほかのことで見ていたら、この Kevin Eagan なる人物が、アイルランド独立史中の現実の、実在の人物であることが、偶然判明したのである。それがきっかけとなつてそれ以後は、独立運動などの政治的情勢などは、専らラルスに頼ることになつたが、そして事実上、フランスはアイルランドの独立党に対して、こっそり資金と亡命地の提供、その他あらゆる種類の援助、激励などの手段を惜しまないという事情が判明した。一般的に言つて、余り遠隔地はそれほどの影響力は認められないが、むしろ近隣の、または相接する他国の不安、騒動、不穏などは、自国にとっての利益であるとの当時の国際感覚によつたものであつたが。

Stuart Gilbert の“James Joyces' Ulysses”という、例の“Ulysses”の構成(話の筋)が古代ギリシャ盲目の詩人 Homer の“Odyssey”の構成に依るもので、人物もそれぞれ Homer の作品中の人物に、即ち Bloom は

Odysseus に、Stephen Dedalus は Odysseus の息子 Telemachus に相当する、等々のことを初めて解明した解説書が、日本に輸入されて、珍重されたのは、われわれの日本訳「ユリシーズ」上巻が昭和年秋第一書房から出版され、われわれが意を新らたにして、第二巻の翻訳に取りかかったころであった。また次に Frank Budgen のものが手に入った。この Budgen という人は、元来は画家であるが、チューリッヒ時代のジョイスの謂わば若い飲み仲間で、(取りまきともいえる。因みにジョイスは貧乏なくせに、酒場に行かないで作品が書けないと称して、毎晩ほど酒場で過す習慣であったという。そういうとき、この Budgen がよくお供をしたものだという。) この人にはジョイスは気がおけずにいろいろなことを打ち明けているが、そうした細々したことを詳しく忠実に記録しているので、チューリッヒ時代のジョイスを知る上から貴重な文献となっている。

われわれが、どのような気持で Joyce の “Ulysses” を日本語に翻訳してみようという、謂わば「若げのあやまち」とでも言ってもよいような難事業に突入したかという、ひとつ、日本に余りよく知られてないベストセラーを訳出して、金儲けしてやろうなどという考えからでは決してなかった。純然たる文学上の理由からであった。つまり伊藤整と私とは小説を書きたがっていたが、自分の思ったほどうまく書けないのに困却して、二十世紀の自分たち青年の気持をうまく表現できる新しいスタイルを模索しつつあった。これからの小説は、森鷗外、夏目漱石、自然主義の島崎藤村、情調派の永井荷風、谷崎潤一郎、川端、横光の新感覚派舟橋らの新興芸術派、さまざまなスタイルが現存はするが、そしてそれらは各々その時代にマッチする業績を果たしたのであるが、二十世紀のわれら青年の思想、内心の欲求、気分などを正確に表現することはできない。新しい酒は、まさに新しい革袋にもらなければならぬというわけである。尤も伊藤とわたくしとは初めから小説を書く意図であった。伊藤は「雪あかりの道」という詩集一巻を故郷北海道で出したのち、一生の仕事として文学をやるために、小説を書くために、上京して来たのであった。辻野は究極的には小説を書く意図があったかどうか、当時は萩原朔太郎を神のごとく崇敬し、中

原中也を悪魔のごとく怖れた——というのは一緒に酒を飲むと中原は何の理由もなく、穿いたチビ下駄を脱いで、突然相手になぐりかかって来るといふ奇癖の持主であったから——要するに人畜に害を与える危険人物であったから——一種の文学青年であった。そしてわたくしはと言えば、広津和郎の「散文精神」論にひそかに共鳴して、小説を志すものは、わが内心の詩的精神を抹殺、逆殺しなければならないという奇妙なパラドックスに捕われた、これまた一種の文学青年に過ぎなかった。

上のような精神状態にあった三人の若者が二十世紀の最大の謎と言われた Joyce の“Ulysses”に飛びついたのも無理ではなかった。

さて今振り返ってみると、この新しい文学に、われわれ若い文学志望者が求めたところのものは何であったか。それは文学の主な二つの要素、即ち表現と内容の二つのうち、最も眼につき易いもの、即ち表現に、勢い赴かざるを得ない有様であった。そしてその表現の斬新な魅力、即ち当時としては全く目新しい「意識の流れ」Stream of consciousness とか、「内的独白」monologu interiux（フランス語、綴字破れると。）とか言ったものに引かれ過ぎた結果、文学の別の根本要素たる内容、思想、意図と言った一面は、むしろ等閑に附して来たきらいはなかったか、などのいろいろ反省が、戦後二回に亘って新潮社から世界文学全集のなかの一冊として出版されたその要請により、前後を通じて約十年間を費した（戦前の初訳の場合、約六年間を要したが）改訂の事業で、“Ulysses”を何度も繰り返し重複して読み直しているうちに、漸く頭を持ちあげて来たのであった。

Stuart Gilbert の名著によって、Joyce の“Ulysses”が古代ギリシャの詩聖といわれる Homer の“Odyssey”に、その構成——物語の筋、ひとつひとつの場面に至るまでも、負うているという事実——例えば Joyce で新聞社の場面は Homer の風の神の場面に当たり（この現代の新聞社の場面が Homer の風の神の場面に当たるといふことは、現在の読者には或はピンと来ないかもしれないが、戦前の新聞社のあのゴォーたる物凄い輪転機の騒音を思い起こしたならば、合点が行くだろう）。Homer で男を捕り子にして豚に化すという女神 Cercy の場面は、Joyce のそれではマボット

街なるベラ・コーエン夫人の夜の魔窟の場面に当たる等々、夫々 Homer のそれと対比され、人物もまた Joyce における主人公 Leopold Bloom は Homer の Odysseus (Ulysses) に当たり、Stephen Dedalus は、Odysseus の息子の Telemachus に当たるということは、戦前から知ってはいたが、戦後繰り返し Joyce の “Ulysses” を読めば読むほど、両者の間の類似、または Joyce が Homer の物語の構成を現代に当てはめて、引き写しにしたばかりでなく、Joyce のそれは Homer 作の “Odyssey” の Parody として、現代文明に対する間接的の批判ではないかという疑問に突き当たったのである。即ち、古代ギリシャに於ける英雄的な場面は、現代の資本主義社会、即ち一九〇四年六月十四日ダブリンの非英雄的な卑俗な場面と化し、魔法を使う女神 Cercy は、現代では淫売窟のお神と化し、登場人物にしてからが、勇氣、知恵、忍耐の三者を兼備して、この三つの徳によってあらゆる人生の危機を見事に乗り切って、愛する妻と息子の待っている生れ故郷の Ithaca の島に、遂には無事に帰りつく、つまり土から生れた人間の故郷たる土に帰りついて一生を終えるという古代ギリシャ人の模範的英雄は、平々凡々たるユダヤ人の広告取りである中年男の Leopold Bloom と化し、貞節の鑑として夫の留守の約二十年間、あらゆる求婚者を退けて来た Penelope, the Chaste 貞女ペネローピの代りに、スペイン系の混血児で、若いころから男を渡り歩いて今も歌手にして興業主の若い男を愛人にしてゐる歌唄いの Marion Bloom 夫人に変わり——古代ギリシャの英雄的の時代から、現代資本主義のこの卑俗な世界への墮落、そして古代の英雄そのものからの平俗な現代人への墮落の何というコントラストであろう。それを思うとき、私にとっては、Joyce の “Ulysses” は Homer の “Odyssey” に対する痛烈な Parody でもあり、古代ギリシャの英雄的世界に対する卑俗猥雑極まる現代に対する、これまた深刻な皮肉でなくて何であろうか、ということが漸くにして分って来たのであった。

以下 Homer の場面と Joyce の “Ulysses” の場面、(凡てを取りあげることは紙数の関係で到底許されないで、或る特長的な数箇の場面を、) 比較対照して、また Homer の登場人物と Joyce のそれと出来得る限りを

比較検討して行くことにしよう。

『ユリシーズ』に於けるその主要人物一覧表を
ここに示すことにしよう。

括弧内の小活字は原『オデュッセア』の該当人物である。

レオポルド・ブルーム (ユリシーズすなわちオデュッセウス) 1866年生れ、この時(1904年)に36歳。ダブリンの新聞《フリーマン》紙の広告取り。ハンガリア系ユダヤ人にしてアイルランドに移住せるルドルフ・ヴィラーグ(後にルドルフ・ブルームと改名)の子として生まれた。博識ぶる癖のある善良な凡人。手紙でマーサ・クリフォードという少女と恋の戯れをしている。

マリオン・ブルーム (ベネロピー) 32歳。レオポルドの妻。ジブラルタルに生まれ、ジブラルタル要塞詰めの英国軍の楽士トウィーディ少佐の娘。歌手としてはマダム・トウィーディの名で知られている。娘ミリセント(ミリィ)がある。プレイゼス・ボイランと恋愛している。

スティーヴン・ディーダラス (テレマカス) 22歳。クロンゴウズ・ウッド・カレッジとローヤル・ユニヴァーシティーの卒業生。ディーズィ氏経営の私立学校教師。サイモン・ディーダラスの子。ジョイスの自伝的要素を与えられた人物。ジョイスの前作『若き芸術家の肖像』の主人公。幼年時代から受けたカトリックの影響を脱して、文士になろうとしている。

サイモン・ディーダラス スティーヴンの父。かつて富裕であったが、今は貧窮し、子女を多く擁え妻を失い、生活に困難しながら、楽天性を失わぬ。テノール歌手として素人ばなれしている。

プレイゼス・ボイラン (誘惑者アンティノウス) 広告張付業。ただし目下マリオン・ブルームその他と共に一座を組織してアイルランド各地を巡業することを計画中、洒落者にして敏腕家。マリオンの恋人である。

馬拉カイ・マリガン (天の使の神メルキュール) 医学生。スティーヴンの友人。ダブリン郊外の古塔マーテロに、スティーヴン及びヘインズと共同生活をししている。口軽の毒舌家。

ヘインズ オックスフォード出身のイングランド人。ケルト文学研究のためダブリンに来ている。溺死しかけた時、マリガンに助けられたのが縁でスティーヴン、マリガンとともに塔に住んでいる。

ミリィ ブルームとマリオンの間の娘。十五歳。マリンガア市の写真屋の見習をししている。アレック・パノンという青年と恋愛しかかっている。

ディーズィ・ガレット (忠告する老將軍ネストル) スティーヴンの働いている学校の校

- 長であり、若きテレマカスが父を捜す旅に出るについて忠告を与える老将ネストルに当る人物。
- バディ・ディグナム (エベルノア) 死者。ブルームその他が彼の葬儀に列席する。彼は前に弁護士のジョン・ヘンリー・メントンの店に務めていたが酒のためにしくじり、失職してから死んだ。
- ルドルフ・ヴィラーク (予言者テレシヤス) ブルームの父。行商人をしたりしていたが自殺す。
- マーティン・カニンガム ブルームの親友。最も善良な良心的な人間であって、ブルームに親切であり、またディグナムの遺族のことも色々心配してやる。彼は飲酒癖のある細君のために苦勞している。
- マーサ・クリフォド (女神カリブソー) ブルームがヘンリー・フラワアという偽名で手紙を交換し、恋愛遊戯をしているタイピスト。
- グリーン夫人 ブルームの昔の恋人。マリオンの友達。気遣いの夫のために苦勞している。
- リーチ・グールドینگ スティーヴンの母の弟。ブルームの友人。弁護士。義兄サイモンとは交際せず。
- ジョン・コンミ神父 スティーヴンが少年時代に在学したクロンゴウズ・ウッド・カレッジの校長。ディグナムの遺児のことでマーティン・カニンガムから世話をたのまれている。
- マイルズ・クローフォド 《フリーマン》紙姉妹紙、夕刊《テレグラフ》紙の編集長。
- ジャック・マックヒュー教授 夕刊《テレグラフ》紙の論説を書いている。大学教授。
- ベンジャミン・ドラッド バスの歌手、ルーベン・ジェイから借金したカウリイ神父のことで骨折る。太った落魄した男で養老院に入っている。ブルーム夫妻やサイモンの友人。
- ルーディ ブルーム夫妻の間に生まれた息子。十一日目に死ぬ。
- C・P・マッコイ ブルームの友人。もと《フリーマン》紙の広告取りをしていたが今では市の死体収容所に働いている。妻がちょっとした歌手である。
- バンナム・ライオンズ ブルームの友人。朝、街上でブルームに逢う。競馬に熱中している人物。
- コーニィ・ケラア オニール葬儀会社の支配人。ディグナムの葬儀の世話をする。ブルームの知人。
- ジャック・パワァ 富裕な商人。もと巡査の子。かくし女を持っている。ディグナムの葬儀に列席する。
- 老トウィーディ 故人。マリオン・ブルームの父親。連隊の鼓手長、ジブラルタル要塞に勤務中にマリオンが生まれた。
- ポップ・ドーラン ディグナムの友人。泣き上戸の酔っぱらい。母親が海岸通りで淫売宿を經營している。

ルーベン・ジェイ 高利貸。ブルームの友人のカウリイ神父が彼に金を借りて苦しめられている。水に溺れた自分の息子を救った船乗りにニンリングしか礼をしない。

ジョン・ヘンリィ・メントン パッディ・ディグナムが生きていたときの雇主。弁護士。ブルームの妻マリオンに昔求愛していたことがある。

トム・カーナン ブルームの友人。パルブルック・ロバートソンの店の注文取り。気取った服を古着で安く買って着ている。

ネッド・ランバート 大学副総長チャタフトンの甥で、家柄よく、穀物商を営む。ブルームの知人。その倉庫はもと聖マリア寺院の集会所で、ヒュー・ラヴ師が調査に来る。カウリイ神父の家主である。

ヒュー・C・ラヴ師 若い僧侶、地方に教会を持ち、貸家をダブリンに持っている。教会史の研究者。

ジョー・ハインズ (ジョーゼフ・マッカシィ・ハインズ)ディグナムやブルームの友人。ブルームと同様《フリーマン》紙の広告取り。

レッド・マリィ 《フリーマン新聞》社員。

ダン・ドースン (風の神イオラス) 政治家。評論家。その古風な論文が新聞にのっているのを皆が読み論議する。

ナネットィ 《フリーマン》紙の校正係長。市会議員。

ジェイ・ジェイ・オモロイ 以前は腕利きの弁護士だったが、病気で退職。落ちぶれて、友人を頼り歩いている。

レネハン マーティン・カニンガムと対蹠的な人物。ブルーム及びスティーヴン及びボイルンの友人。帮間的な人物で、女と競馬と酒に日を送る。マリオンとふざけ合ったこともある。《スポーツ》紙の社員。

オマドン・バーク スティーヴンの友人。文士。アイルランド西部から出て来た男。

ノオジィ・フリン ブルームの友人。凡庸な人間。

デニス・ブリーン ブルームの昔の恋人を妻にしている男。半気違い。

エイ・イー又はジョージ・ラッセル スティーヴンの知人。アイルランド文芸復興の大立者。詩人。神秘主義者。

図書館長リスタァ (トマス・ウィリアム・リスタァ)

ジョン・エグリントン アイルランド文芸復興当時の詩人。評論家。スティーヴンと論争する。

ベスト スティーヴンの友人。文学論でスティーヴンの肩を持つ。

シング アイルランドの戯曲家。スティーヴンの知人。

ムア アイルランドの小説家。スティーヴンの知人。

グレゴリィ夫人 アイルランドの戯曲家。スティーヴンの知人。

ラリィ・オラーク ブルームの家の付近の酒場の主人。無愛想な男。

ケーティ・ディーダラス ブーティ・ディーダラス 二人共スティーヴンの幼少な妹。サイモンの子。

- マギィ・ディーダラス スティーヴンの妹。年長にして他の幼妹の世話をしている。
- ディリィ・ディーダラス スティーヴンの妹。街上で父のサイモンに逢って一シリン
グニペンス金をもらい、フランス語独習書を買う。
- 盲目の青年 調律師——ブルームに道を越させてもらい、雨外套を手にした気違いに
杖を落される。オーモンド・バーのピアノを直す。
- ミス・ダン タイピスト。ボイルンの事務所の傭員。
- トム・ロッチフォド 馬券売り。競馬や演劇のプログラム指示器を発明して売り込も
うとしている男。マンホールの中から半死人を引き上げる。
- カウリィ神父 高利貸ルーベン・ジェイに苦しめられている。ベン・ドラッドが、う
まく取りはからって救ってやる。
- ロング・ジョン・ファミング 副執行官。カウリィの借金のことでベン・ドラッドはこ
の男に頼みこむ。
- パトリック・アロイジウス・ディグナム 故ディグナムの遺児。少年。
- ジョン・ワイズ・ノーラン ブルームの友人。ディグナムの遺児の世話をしている。
遊び人。
- リディア・ダウス（魔女サイレン） オーモンド・ホテルの酒場の給仕女。ブロンズ色
の髪でやや陰気な女。
- マイナ・ケネディ（魔女サイレン） オーモンド・ホテルの酒場の給仕女。金髪で陽気
な女。リスモア街四番地に住んでいる。
- アルフ・バーガン 酔っぱらいの小男。故人ディグナムが生きて歩きまわっているの
を見る。
- ジョン・ハワード・バーネル 革命家チャールズ・スチュアート・バーネルの弟。ダブ
リンの警視総監。
- ウィリアム・ハンブル・ダドリィ伯 アイルランド総督。
- ハッチンスン ダブリン市長。
- 市民（一つ目の巨人キュクルオーベス） ダブリンの各酒場を飲みまわっては知人にた
かっている熱狂的民族主義者。国粋家。ギャリオウエンという犬をつれて歩く。
ユダヤ人嫌いで、ブルームと喧嘩する。
- ガーティ・マクドウェル（王女ノオンカ） 美少女。夕暮の海岸でブルームを見、たが
いに心を惹かれる。非常に美人であるが跛の女。
- シスイ・カフリィ ガーティの友達。陽気でお転婆。
- エディ・ボードマン ガーティの友達。近眼で意地わる。
- レギィ・ウィリィ ガーティの恋人。中学生。
- 看護婦キャラン ホオン産科病院の看護婦。ブルームが多少心を惹かれている。
- マイナ・ピュアフォイ お産で苦しんでいる。マリオンの友達。多産の女。銀行員の
妻。
- ディクソン・見習医師 スティーヴンの友人。ブルームが蜂に刺されたとき治療して

やったことがある。

ヴィンセント・リンチ スティーヴンの旧友。医学生。女と逢引きをしているのを旧師コンミ神父に見つけられる。

バンチ・コステロ スティーヴンの友。猥雑な酔っぱらい。

アレック・バノン 学生。マリンガア市で写真屋の見習をしているブルームの娘ミリィと恋愛している。

ベラ・コーヘン (男を豚にする女神キルケエ) マボット街の淫売屋のお神。

ゴオリィ スティーヴンの友。ルンペンになり、深夜のダブリンをさまよう男。

「山羊皮」(ユリシーズの下僕で豚飼いのユウメウス) ブルームとスティーヴンが深夜に憩う酒場「御者溜り」の主人。

ガムリィ サイモン・ディーダラスの旧友人。落ちぶれて夜番をしている。

リオーダン夫人 死者。金持の寡婦で、一時スティーヴンの家に同居していた。後ブルーム夫妻と知合いになる。

マルヴィ中尉 ジブラルタルで最初にマリオンの恋人だった男。マリオンは常にこの男を思い出す。

フレミング夫人 ブルーム家に繕いもの手伝いなどに来ている女。

この主要人物一覧表を一見しただけで明瞭であるが、ホーマーのそれらが如何に史雄的で、ジョイスのそれが、ホーマーの諸人物と比べて如何に卑少猥雑なものであるかが納得される。この人物一覧表の古代ギリシャと現代アイルランド対比を見ただけでも、私にはジョイスの現代社会に対する痛烈辛辣な風刺としか考えられないが、それは牽強附会の偏見であろうか。

古代人は死者の国の設定によって行ったものと思われる。

注. これらの引用は凡て1955年新潮社版伊藤整・永松定共訳からの引用である。

次に掲げるのは、酒で身を持ちくずし、失職して死ぬディグナムという平凡なダブリン市民の葬式の場面である。これは本物語の第六挿話にあたる。この葬式の場面は、ホーマーの原話では、ユリシーズが女神サーシィの指示にしたがって、自分の将来の運命の予告を受けるために死者の国に行く、という極めて厳粛な、本人の一生を決定するほど重大な場面である。

ところでジョイスの場合は、ここのところはどうなっているか。午前、ブルーム、ステイーヴンの父サイモン・ディダラス、マーティン・カニングム、ジャック・パワーという死者の友人である四人の男がひとつ馬車でディグナムの葬式に出かける。葬式がすむと打ち揃って、街の酒場に出かけ、初めはしきりに死者を、いい男だったとほめちぎって、酒のために身をほろぼした男を追悼する。ところが酒とお話がだらだらと長続きしているうちに、話は落ちて、例のおきまりの女の話となる。これは明らかに死者に対する冒瀆であるが、この退屈な人生に於てはよくあることである。我が国では、昔は、葬式のあとは、よその家などに立ちまわったり、ぶらぶらそこらを歩き廻ったりせずに、真っすぐ家に帰れという言いならわしがあつたものであるが、これは『ユリシーズ』の中の前述のごとき、死者に対する冒瀆的行為に思わず陥ち入ることを防ぐためであつたかもしれないが、西洋ではこのような戒めがあるのかどうか問題である。

次が第十五挿話の、ベラ・コーエン夫人の魔窟の場面である。これは、マボット街に始まり、ロウア・タイロン街八十二番地のベラ・コーエン夫人の売笑窟でその頂点に達する夜の街の幻想的描出である。この挿話が戯曲体または詩劇形式又はシナリオ形式と言うべきもので描かれていることと、その内容が夢想的で、また極めて奔放な内容を持っていることは著名であつて、ある評者は、『ユリシーズ』全体のうち、第六挿話の墓地の場を最高の傑作と言っているが、多くの評者たちは、この第十五挿話をもって最もすぐれた部分である、と言っている。分量から言つてもこの挿話は、他の挿話の三編又は四編ほどの量に当る。本当の意味では写実家というよりも、幻想家に属するところのジョイスの才能が、この戯曲体の部分で最も自由に発揮されていることだけは疑いが無い。この形式に近いもので書かれた近代文学の傑作としてはゲーテの『ファウスト』の中に『ワルプルギスの夜』と言われている夢幻劇の場があり、またフローベルには『聖アントワヌの誘惑』がある。ジョイスの尊敬していたハウプトマンの『沈鐘』もその系統のものである。一般にジョイス研究者たちはこの挿話を『ユリシーズ』の「ワルプルギス・ナハト」と呼んでいる。

夜の街の入口に当るマボット街で子供たちが白痴をからかっている。シスイ・カフリイとエディ・ボードマンが、そこをうろついている。この夜の街にはシスイだけでなく、ガーティとか、もとブルーム家にいた女中のメアリィ・ドリスコルとか、グリーン夫人とか、マリオン夫人とか、その他ここに現われる筈のない人物が出て来るが、それは幻想である。しかし終りに近いところで、コーニィ・ケラァが出現するのは、それと違って現実的意味を持っているものである。スティーヴンがリンチと二人でこの夜の街を歩いて行く。そのスティーヴンを追いかけて、ブルームがやって来る。彼は雨あがりの軌道の滑り止めのためにやって来る砂撒き電車にぶつかって、轢かれそうになる。また彼は腹の空いているスティーヴンに食わせようとして豚肉と羊肉とをその辺で買うが、その匂のために犬に後をつけまわされるので棄ててしまう。父のルドルフ・ブルームが現われて、無駄使いをするな、とブルームを叱りつける。次には母が現われ、マリオンが現われ、ガーティが現われて、この三人の女性はそれぞれにブルームを非難する。次にはグリーン夫人が出て、ブルームと昔のことを語り、恋愛を復活させそうな気分になる。

そのうちにブルームは立小便をしたと疑われて夜警に引っぱられ、それがきっかけで彼の裁判の場になる。彼がダブリンの名流の女性たちに恋文を送ったとか、猥褻な写真を送ったという非難を受ける。いずれもブルームの心の中にあった衝動の具体化と見るべきものである。その裁判が続いているうちに、ブルームは次第に有利な立場に変わり、市長になり、またアイルランド王の位につく。だが間もなく群集に攻撃されて追放される。

その幻想から抜け出したブルームは、ゾーイという淫売婦に導かれて、ベラ・コーヘン夫人の営む娼家にスティーヴンがいることを知り、入って行く。そこにスティーヴンとリンチがいる。おかみのベラとブルームの間に、暗黙の心理劇が行われて、ブルームは女になり、ベラは男性になって、ブルームを征服する。ブルームはスティーヴンが女どもに金をたかり取られそうになるのを救い、その持ち金1ポンド・7シリング・11ペンスを預かってやる。またブルームは幻想の中でボイランとマリオンの逢引の場を見、

自分がその二人の世話をする女衞になっているように感ずる。そのうちに、酔って来たスティーヴンがダンスをすると、その後の眩暈の中で、スティーヴンは亡くなった母が現われて来るのを見て恐怖にうたれ、ステッキを振って、その娼家のランプを叩きこわして街へ飛び出す。

後に残ったブルームはそれを何とか言いつくろって出る。すると街上でスティーヴンは英国兵のカアというのと、コムトンというのにと喧嘩を吹きかけられ、しばらく問答した上、街上に殴り倒される。ブルームはそれを見ているうちに亡くなった息子のルーディとスティーヴンが同じ人間であるような幻想を抱き、スティーヴンを助け起して、リッフィー河の岸に近い方へ、何か飲みものはないと捜して、深夜12時頃の街を歩いてゆく。

この挿話は、『オデュッセア』では、魔法を使う女神サーシ(キルケー)の宮殿の場に当たるものと言われている。(I巻の解説参照)サーシの場面は、原『オデュッセア』では、日の神の島で部下が全部滅びるという第十四挿話の場面よりも前に当っており、ユリシーズとその部下が風の神の島(この作品では新聞社の場面なる第七挿話)の次に到着した島のことである。ユリシーズの部下の半分が、ユーリロカスに引率されてその島の探険に出かけ、サーシの宮殿に招き入れられる。そしてその男たちは皆、サーシの魔法によって豚に変えられてしまう。ユーリロカスのみが門の外に残っていてその不思議な事件をユリシーズに知らせに戻る。ユリシーズは後から出かけてゆき、マーキュリイ神(ヘルメス)の助けによってサーシの魔法を封じ、部下を人間に生き変えらせ、サーシの愛人となって1年を過ごす。この挿話では、娼家の女主人ベラ・コーヘンがそのサーシに当り、スティーヴンやリンチを助け出すところのブルームがユリシーズに当るわけである。

さて今度は、本文から直接引用してみよう。

数々の声

(ひそひそ声で。)ハラウン・アル・ラシッド王^{カリフ}(訳注「アラビアン・ナイト」の王。人身売買の雰囲気)に落ちた。

べ　　口

(快活に。)そうだ。誰彼なしに歓迎しろ。白いパンツをちらりと見せるには、膝

までしかない、儉約した、恐ろしく短いスカートは、効目確かな武器だし、又、エメラルド色の靴下留めをして、膝の上まで匂い上がる長い真っ直ぐな縫い目付きの、透き通るような靴下は blasé（遊びに飽きた）男の本能でちくりと来るものだ。高さ 4 インチの、ルイ十五世型踵な気取って滑るように歩いたり、挑発的なお尻をして腿はなだらかに、両膝は軽くくっつけて、ギリシャ式にお辞儀をするように練習おし。お前のありっけの魅力を發揮して男達をたぶらかせ。ゴモラの悪習（「創世紀」13の3。ソドム、ゴラモの町は男色、獣姦な）のとりもちをおし。
どの悪徳のため神の怒りにふれ、ほろぼされる

ブルーム

（赤面した顔を腋の下に隠し、そして食指を口に入れて作り笑いする。）おお、あたしあなたが何を匂わしていらっしやるのか分かりましたわ。

ベロ

ほかに何の役に立つかい、お前のようなインポテントが？（彼は屈み、じっと窺い見て、扇で乱暴にブルームの臀部の太った脂肪囊の下を突つく。）立て！ 立て！ 尾無し猫奴！マングス・キヤット これはいったいどうしたんだ？ お前の縮れ毛茶瓶はどこへ行ったんだ、それとも誰かがそれをちょん切ったのか、このこげこっこう奴？ 歌え、鳥や、歌え。馬車のうしろでおしっこをしている六つの男の子のようにぐにゃぐにゃしてらあ。こんなポンプは売ってバケツを買えよ、（声高く。）お前は男の役が勤まるかい？

ブルーム

エクルズ街では……

ベロ

（嫌味たっぷり。）俺はお前の感情を害するつもりはこれっばかりもないがね、然しあそこでは腕っ節の強い男（訳注 ボイランのこと）が代わりをしているんだよ。形勢逆転さ、お人好しの若えの！ 奴は野育ちの荒くれ男だよ。間抜け奴、お前がああな癪や節や虎だらけの武器を持っていれば何よりだが。奴は一番いったぞ、いいか！ 足を足に、膝を膝に、腹を腹に、乳房を胸に！ 奴は擧なしじゃないぞ。お尻から、はりえにしだのようにむしゃくしゃの赤毛が、はみ出てらあ！ 九か月待ってみろ、若えの！ 赤毛の小馬が今頃は彼女のお腹の中で蹴ったり咳払いしたりしているよよ！ こう聞きゃかっとしようが、ええ？ どんと来たろう？（彼は軽蔑して唾を吐く。）痰壺奴！

ブルーム

あたしはこんなひどい取り扱いを受けて、あたしは……訴えてやるわ。賠償金百ポンド。言うに忍びない。あたしは……

ベロ

できたらやってみろ、かたわ家鴨奴。どしゃ降りなら有難えが、お前のほそぼそ雨じゃ真っ平さ。

ブルーム

気が狂いそうだ！ モル（訳注 モリイの男性化した呼び方。ブルームは女になって妻の名を男性で呼ぶ）よ、あたしは忘れていた！ 許しておくれ！ モルよ！……あたし達二人は……でも……

べ 口

（つれなく。）いや、レオポルド・ブルーム、お前が、二十年の夜を眠りの洞スライピ・ホロウ（訳注 リントン・アーヴィング作。山の中の洞で眠る）で横になって眠って以来、万事が女の意志によって変えられてしまったのだ。家に帰って見てみる。

（老いた「眠りの洞」が原野を越えて叫ぶ。）

「眠りの洞」

リップ・ヴァン・ウィンクルよ！ リップ・ヴァン・ウィンクルよ

ブルーム（訳注 年をとった男のウィンクルになる）

（ぼろの鹿皮製の靴をはき、錆びた鳥銃を持って、爪先立ち、手さぐりで歩き、瘠せた骨張った髭面ひげづらをして菱形の格子窓から覗き込みながら、叫ぶ。）そら見つけた！ あの女だ！ マット・ディオンの家での最初の晩！（訳注 ブルームが初めてマリオンに逢ったとき）しかしあの着物、緑色のは！ それに髪は金色に染めてあるし、そしてあの男は……

べ 口

（侮るように笑う。）梟ふくろうさん、あれはお前さんの娘だよ、マリಂಗアの医学生と一緒にいるのさ。

（緑色の着物を着、軽いサンダルを穿き、青いスカーフを潮風になびかせて、金髪のミリィ・ブルームが、恋人の両腕から跳び退き、若々しい目を愕然と見開いて叫ぶ。）

ミ リ イ

あら！ 父ちゃんだわ！ けれど、おお、父ちゃん、何てまあ年とったんでしょう

べ 口

変わってるかい、え？ あの飾り棚だな、あの少しも使ったことのない写字台、ヘガティ伯母さんの肘掛椅子ひじかけ、昔の大家達のあの複製など、昔のままだよ。あの絵の中では男が男友達とそこで贅沢三昧に暮らしていらあ。「郭公鳥の巢窟かつどう（訳注 妻に裏切られた男たちの住居）」て題だよ！ そうじゃないか？ お前は何人女を物にしたかい！ 暗い通りで女どもの後をつけて、おい扁平足奴、ぼそぼそ何か言ってお説いたろう。何だい、この男淫売奴。食料品の包みを持った罪のない細君たちを狙うなんて、今度はお前の番さね。他人事どころの騒ぎじゃないぜ。

ブルーム

彼女等は……あたしは。

べ 口

（きっぱりと。）奴等の足はお前が折角レンの競売で買ったブラッセルの紛いの絨毯を踏みじめるだろうよ。モルと馬乗り遊びしている最中に、モルのパンツの中で跳ねてる蚤を探そうと馬鹿騒ぎをしている内に、奴等は、お前が芸術の為の芸術と

いうわけで雨の中を持って来た影像をぶち毀してすうだろうよ。奴等はお前の机の一番底の抽斗の秘密を発あばいてしまうだろうよ。お前の天文学の手帳を裂きとって点火紙ひつけごより縋をこさえるだろうよ。それから又奴等は、ハプトン・リーダムの店で買った十シリングの真鍮しんちゆうのストーブ囲いに唾を吐きかけるだろう。

ブルーム

十シリング六ペンスです。下種げすどものしそうな事だ。行かして下さい。私は帰ります。そしてきっと……。

声

誓ちかって！（訳注「ハムレット」一の五）

（ブルームは拳を固め、口に獵用短刀をくわえて匍かい進む。）

ベ　　口

賄客としてか、それとも間夫としてか？　もう遅いよ。お前が第二号のベッド（訳注 I巻270頁、図書館の場。シェイクスピアが遺言して發通した妻に残したセカンド・ベスト・ベッド、参照）を作っておいたんだから、他の奴がそこに臥ふせてるに違ちがいないや。汝が碑銘は書かれたり。お前はもうおしまいだってことを忘れるな、この老耄おいぼれの豆野郎。

ブルーム

正義よ！　全アイルランドがかかって、たった一人をいじめるのか！　誰も……？

（彼は親指を噛む。）

ベ　　口

お前が上品さや優雅さを爪の垢あかほどでも持っているなら糞喰えだ。珍しい古渡り葡萄酒を御馳走してやるから、一杯機嫌でびよんびよん地獄へでも跳ねて行きな。遺言書に署名して、有り金はそっくり置いてゆけ。一文なしなら、いいかい畜生、作しって来い、盗ぬんで来い、奪さらって来い！　俺達みんなでお前を藪陰の糞壺に埋めてやる。そこで、俺の義理の甥で俺が結婚したカック・コウエンじじい爺や、痛風病みの老耄訴訟代理人の、首にリュウマチのある男色漢や、その他十人か十一人の野郎どもの名前は何といったっけか、同じ汚水溜めで息をつまらせている、俺の亭主達と一緒に大往生するがいいや。（彼は声高い痰のつまったような声で笑わずれる。）俺達はお前に肥料をくれてやるよ、フラワァさん！（彼は冷笑するように口笛を吹く）あばよ、ポルディ！　あばよ、父ちゃん！

ブルーム

（頭をぼんと叩く。）俺の意志の力の弱さ！　記憶！　俺は罪を犯した！　俺は苦……

（彼は涙を流さずに泣く。）

ベ　　口

（嘲笑する。）泣なき上戸じやうとめ！　鱈たらの空涙だ！

（ブルームは打ちひしがれ、生贅いけいに捧げるためにしっかと目隠しされ、顔を地面

に庄しつけて歎敬する。臨終鐘が鳴り渡る。割礼を受けた人間の黒く肩掛けを覆うた姿が、「麻を着、灰を蒙^{かぶ}って、」嘆きの壁の所に立っている。エム・シュロモヴィツ、ジョゼフ・ゴールドウオタア、モーゼス・ヘルツォーグ、ハリス・ローゼンバーグ、エム・モイゼル、ジュイ・シトロン、ミニイ・ウォッチマン、オー・マスティアンスキイ、レオポルド・アブラモヴィツ尊師、チェイズン等。腕を振りながら彼等は霊となって、背信者ブルームの死を悼^{いた}む。

割礼を受けた人々

(花ではなく死海の果実(訳注 死海のほとりに実る果実は中が空虚だという)を彼の上に投げかけながら、陰気な喉音で唱う。) Shema Israli Adonai Elohenu Adonai Echad (やよ、イスラエル人よ、主は唯一神なり、主は唯一なり。)

すなわち淫売窟のマダム、ペラ・コーヘン夫人は、いつの間にかペロというサディズム的な男性と化し、女性化したブルームを乗馬用の鞭でなぐり、四つ這いになったブルームに馬乗りになったりして、さんざんブルームをいじめ抜くのである。而もブルームの方は唯々諾々として、むしろよろこんで女の命に服従するのである。蓋し、現代の女性化した男性の象徴でもあろうか。古代ギリシャの理想的英雄ユリシーズに対して、現代のユリシーズたるブルームの何という情けなさ。これをしてジョイスの現代文明に対する巨大なる皮肉、嘲笑として見ずにいられるだろうか。

筆者は、ジョイスの『ユリシーズ』を約五十年間繰返し巻き返し、何度も何度も、しらみつぶしに読みこんでゆくうちに、これは卑小猥雑にして何のヒロイズムもない現代文明に対する痛烈無比な皮肉、嘲笑、風刺としか思えなくなった。若き日に『ユリシーズ』の手法の斬新さに驚倒した筆者は、五十年後の今日、その秘密の重大なる内面の一部を覗き得て、今さらながら動転している次第である。そして筆者が上述の怖るべき考えに立ち到ったことは、果して荒唐無稽な一片の妄想として、これをしりぞけるべきであろうか。諸賢の教示を乞う所似である。 (完)